

教育研究業績書

2020年10月27日

所属：食物栄養学科

資格：講師

氏名：小林 知未

研究分野	研究内容のキーワード
栄養教育論、栄養疫学、公衆栄養	食事調査、栄養教育、食育、地域活動
学位	最終学歴
博士（学術）、修士（生活環境学）、学士（食物栄養学）	奈良女子大学大学院 人間文化研究科 共生自然科学専攻 博士課程

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
1. オフィスアワーの活用による教育効果の向上	2014年4月～2019年3月	オフィスアワーを開設した結果、学生が講義内容の疑問点についての質問や管理栄養士国家試験問題に関する質問をする場を構築することができた。その成果として、学生が疑問に思っている分野を把握することができ、素早く講義内容に反映することができた。また、国家試験対策では、学生が理解できていない分野を強化するための講義を行い、理解度を高めることができた。
2. インターネット活用による授業サポート	2014年4月～2019年3月	「公衆栄養Ⅰ・Ⅱ」「公衆栄養学実習」「公衆栄養学臨地実習」「栄養教育論Ⅰ」「栄養教育論実習」「卒業研究」において実践した。 C-learningを用い、教員と学生がメールや掲示板を用いて、情報提供、質問、回答や指導を行った。これにより、学生とのコミュニケーションを取り、学生の学習に関する悩みや心配事、学習の進捗状況を把握でき、問題が起こった場合に素早く対処することが可能であった。
2 作成した教科書、教材		
1. 小児用食物摂取頻度調査 食品モデル写真集	2008年	伊達ちぐさ、福井充共著 奈良女子大学生生活環境学部食物栄養学科公衆栄養学研究室発行 小児用食物摂取頻度調査を行う際に、対象者が食物の「量」と「頻度」を思い出す際に使用する写真集である。
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
4 その他		

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1 資格、免許		
1. 博士(学術)	2010年9月30日	論文題目名：Dietary methodological study: development of a food frequency questionnaire for Japanese children
2. 修士(生活環境学)	2006年3月19日	論文題目名：リハビリにおける機能回復と栄養状態について
3. 管理栄養士	2004年6月30日	管理栄養士名簿登録番号 第一一四一四号
4. 栄養士	2004年3月23日	栄養士名簿登録番号 兵庫県 第四四一四号
2 特許等		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
4 その他		
1. 【報告書】2019年度 堺市宮園校区早起きをして朝ごはんを食べよう会ボランティア活動報告書	2020年3月	大阪府堺市中区宮園町では、学童期の子どもたちが望ましい生活習慣を身に付けることができるよう「はやおき、朝ごはん、歯磨き、元気にいってきます!」をスローガンとした「子どもの生活習慣応援事業」を地元自治体と堺市中区役所が企画立案し、2016年6月より宮園校区地域まちづくり協議会主催のもと、毎月1回開催されている。帝塚山学院大学では、この事業に対し平成28年度から人間科学部の学生有志がボランティアとして参加し、朝食支援や歯磨き指導、本の読み聞かせ等のサポートを行っている。2019年度に実施したボランティア参加についてまとめ、また、朝食摂取状況に関する調査や学生ボランティア活動に関するアンケート調査結果、子どもたちへの食育教材検討等についてもまとめた。(小林知未、金田直子、福田ひとみ)
2. 大東シニア大学(食生活改善推進員の養成講座)講師	2019年7月30日	大阪府大東市が開催している、大東シニア大学(食生活改善推進員の養成講座)の講師として、大東市民を対象に減塩についての講義・実習を行った。食物摂取頻度調査結果の説明、塩分摂取と高血圧との関連、味噌汁等の汁料理の塩分含有量の計算方法を説明した。また、ひとつ

職務上の実績に関する事項

事項	年月日	概要
4 その他		
3. まちかど保健室 講師	2019年3月9日	まみの食塩重量測定や家庭の味噌汁の濃度測定、豆腐にかける醤油の重量測定、手軽に作れる減塩吸い物作り等の実習を行い、参加者に対して、減塩の意識付けを行った。
4. 【報告書】2018年度 堺市宮園校区早起きをして朝ごはんを食べよう会ボランティア活動報告書	2019年3月	堺市南区で開催されている「まちかど保健室」において、312弁当箱法を用いた食事バランス改善弁当について講義を行った。
5. 「こども霞が関見学デー」(厚生労働省) 講師	2018年8月1日	大阪府堺市中区宮園町では、学童期の子どもたちが望ましい生活習慣を身に付けることができるよう「はやおき、朝ごはん、歯磨き、元気にいってきます!」をスローガンとした「こどもの生活習慣応援事業」を地元自治会と堺市中区役所が企画立案し、2016年6月より宮園校区地域まちづくり協議会主催のもと、毎月1回開催されている。帝塚山学院大学では、この事業に対し平成28年度から人間科学部の学生有志がボランティアとして参加し、朝食支援や歯磨き指導、本の読み聞かせ等のサポートを行っている。平成30年度に実施したボランティア参加についてまとめ、また、朝食摂取状況に関する調査等についてもまとめた。(小林知未、金田直子、福田ひとみ)
6. 大東シニア大学(食生活改善推進員の養成講座) 講師	2018年7月26日	「こども霞が関見学デー」(厚生労働省)において、子どもとその保護者を対象に、「野菜をおいしく食べて元気になろう」をテーマに講義を実施した。
7. 富田林保健所事業 NoベジNoライフ!セミナー 講師	2018年6月16日、2018年9月22日	大阪府大東市が開催している、大東シニア大学(食生活改善推進員の養成講座)の講師として、大東市民を対象に減塩についての講義・実習を行った。食物摂取頻度調査結果の説明、塩分摂取と高血圧との関連、味噌汁等の汁物料理の塩分含有量の計算方法を説明した。また、ひとつまみの食塩重量測定や家庭の味噌汁の濃度測定、豆腐にかける醤油の重量測定、手軽に作れる減塩吸い物作り等の実習を行い、参加者に対して、減塩の意識付けを行った。
8. 大阪府立農芸高等学校 体験学習講座 講師	2018年1月14日	大阪府富田林保健所の事業である高校生の生活習慣及び朝食改善、野菜摂取量増加を図ることを目的とした「NoベジNoライフ!セミナー」の講師として、大阪府立金剛高校の高校生に対して食教育を行った。また、食教育の効果を評価するために、朝食食事調査、アンケート調査、身体計測を実施した。結果は高校生に報告し、食習慣改善のための資料として還元した。
9. 貧血対策食育用冊子作成	2018年	大阪府立農芸高等学校にて、高校生を対象に食物栄養学科で学ぶ科目についての説明を行った。また、公衆栄養学・栄養教育分野内容を中心に授業を行った。その後、2人グループに分かれ、複数枚の料理カードを用いて、友人の食事バランスを把握し、どのようにすれば食事バランスを改善することができるかを話し合う等、栄養教育の体験講座を行った。この授業を通して、高校生が自分自身の食生活への興味関心意欲を高められる内容とした。
10. 大東シニア大学(食生活改善推進員の養成講座) 講師	2017年7月20日	堺フェニックスライオンズクラブと日本赤十字社 大阪府赤十字血液センターと食物栄養学科が連携して貧血対策食育用冊子「テツ子のでっこ講座」を作成し、栄養教育を実施した。
11. 夢ナビライブ 講師	2017年6月17日	大阪府大東市が開催している、大東シニア大学(食生活改善推進員の養成講座)の講師として、大東市民を対象に減塩についての講義・実習を行った。食物摂取頻度調査結果の説明、塩分摂取と高血圧との関連、味噌汁等の汁物料理の塩分含有量の計算方法を説明した。また、ひとつまみの食塩重量測定や家庭の味噌汁の濃度測定、豆腐にかける醤油の重量測定、手軽に作れる減塩吸い物作り等の実習を行い、参加者に対して、減塩の意識付けを行った。
12. 堺市中区子ども生活習慣応援事業への参画	2017年4月～現在	FROMPAGEが主催する夢ナビライブにて、高校生約200名を対象に朝食の役割について講義を行った。これまで高校生を対象に行ってきた朝食の食事バランスや生活習慣、不定愁訴調査結果や身体計測値を用いて、データに基づいた「朝食摂取の重要性」「朝食の料理バランスの重要性」の説明を行った。講義参加者からのアンケート結果より、朝食内容についての関心が高まり、自分自身の朝食を見直したいとの声が多く聞かれた。今後も、調査結果を多くの生徒に報告し、高校生の食習慣改善に繋げる必要があると考えられた。
13. 大阪府立貝塚高等学校 体験学習講座 講師	2017年1月12日	堺市宮園校区の地区組織が主体となり毎月1回行っている「はやおきして朝ごはんを食べよう」事業に参画し、ボランティア学生への指導を行っている。また、この活動について毎年活動報告書をまとめ、小学校、区役所、町づくり協議会に取組み報告を行っている。
		大阪府立貝塚高等学校にて、高校生を対象に食物栄養学科で学ぶ科目についての説明を行った。また、公衆栄養学・栄養教育分野内容を中心に授業を行った。栄養アセ

職務上の実績に関する事項

事項	年月日	概要
4 その他		
14. 大東シニア大学(食生活改善推進員の養成講座) 講師	2016年7月28日	<p>スメントや栄養マネジメントについての説明を行った後、食事バランスガイドを用いて自分自身の前日の食事バランスを把握してもらい、その改善点を考えてもらい、発表してもらった。この授業を通して、高校生が自分自身の食生活への興味関心意欲を高められる内容とした。</p> <p>大阪府大東市が開催している、大東シニア大学(食生活改善推進員の養成講座)の講師として、大東市民を対象に減塩についての講義・実習を行った。食物摂取頻度調査結果の説明、塩分摂取と高血圧との関連、味噌汁等の汁物料理の塩分含有量の計算方法を説明した。また、ひとつまみの食塩重量測定や家庭の味噌汁の濃度測定、豆腐にかける醤油の重量測定、手軽に作れる減塩吸い物作り等の実習を行い、参加者に対して、減塩の意識付けを行った。</p>
15. 富田林保健所事業 NoベジNoライフ！セミナー 講師	2016年6月23日、2016年9月16日	<p>大阪府富田林保健所の事業である高校生の生活習慣及び朝食改善、野菜摂取量増加を図ることを目的とした「NoベジNoライフ！セミナー」の講師として、大阪府立長野高校の高校生に対して食教育を行った。また、食教育の効果を評価するために、朝食食事調査、アンケート調査、身体計測を実施した。結果は高校生に報告し、食習慣改善のための資料として還元した。</p>
16. 夢ナビライブ 講師	2016年6月18日	<p>FROMPAGEが主催する夢ナビライブにて、高校生約200名を対象に朝食の役割について講義を行った。これまで高校生を対象に行ってきた朝食の食事バランスや生活習慣、不定愁訴調査結果や身体計測値を用いて、データに基づいた「朝食摂取の重要性」「朝食の料理バランスの重要性」の説明を行った。講義参加者からのアンケート結果より、朝食内容についての関心が高まり、自分自身の朝食を見直したいとの声が多く聞かれた。今後も、調査結果を多くの生徒に報告し、高校生の食習慣改善に繋げる必要があると考えられた。</p>
17. 【報告書】平成28年度熊取町ヘルスアップ推進員養成事業「ココカラびんびん!元気リーダー養成講座」報告書	2016年3月	<p>(発行：大阪府国民健康保険団体連合、執筆担当箇所：P9-30)</p> <p>講座前後における身体組成及び身体活動量、歩数、食事摂取量の変化に関して報告書をまとめた。解析対象者は、講座前後の計測値が揃っている男性2名(74.0±1.4歳)、女性25名(69.0±6.9歳)とした。講座内のグループである「食グループ」と「歩グループ」の2群に分け検討した。食グループでは、臍周囲および拡張期血圧で介入後に有意に減少し、筋肉量は有意に増加した。さらに食行動質問表において、食動機や空腹・満腹感覚、食事内容等が改善した。歩グループでは、臍周囲および体脂肪量が介入後に有意に減少し、筋肉量は介入後に有意に増加した。このような取り組みを続けることにより、継続した健康維持、そして健康増進に繋がる可能性があると考えられた。</p>
18. 富田林保健所事業 NoベジNoライフ！セミナー 講師	2015年7月16日、2015年9月18日	<p>大阪府富田林保健所の事業である高校生の生活習慣及び朝食改善、野菜摂取量増加を図ることを目的とした「NoベジNoライフ！セミナー」の講師として大阪府立富田林高校の高校生に対して食教育を行った。また、食教育の効果を評価するために、朝食食事調査、アンケート調査、身体計測を実施した。結果は高校生に報告し、食習慣改善のための資料として還元した。</p>
19. 富田林保健所事業 NoベジNoライフ！セミナー 講師	2014年9月10日、2014年12月23日	<p>大阪府富田林保健所の事業である高校生の生活習慣及び朝食改善、野菜摂取量増加を図ることを目的とした「NoベジNoライフ！セミナー」の講師として、大阪府立金剛高校の高校生に対して食教育を行った。また、食教育の効果を評価するために、朝食食事調査、アンケート調査、身体計測を実施した。結果は高校生に報告し、食習慣改善のための資料として還元した。</p>
20. 【報告書】平成26年度交野市健康づくり・地域ネットワーク推進事「健康もりもり隊養成講座」～市民に健康を啓発するリーダーの養成～報告書	2014年3月	<p>(発行：大阪府国民健康保険団体連合、執筆担当箇所：P13-28)</p> <p>講座前後における身体組成及び身体活動量、歩数、食事摂取量の変化に関して報告書をまとめた。解析対象者は、講座前後の計測値が揃っている男性12名(69.8±4.7歳)、女性25名(64.7±5.3歳)とした。男性では、食事においては、魚介類の摂取量が講座後で有意に増加し、油脂類の摂取量が講座後に有意に減少した。一方、女性では、講座後において歩数や自転車等の身体活動量が増加した。また、食事においては、油脂類や菓子類の摂取量が減少した。自分自身の健康づくりへの興味が増えたり、健康づくりを実践しているという者も見られた。これらのことから、この講座を開催することで、対象者の健康づくりへの意識向上に寄与できた可能性が示唆された。</p>
21. 【報告書】平成25年度富田林市健康づくり・地域ネットワーク推進事業「富田林ウォーキングサポーター養成講座」報告書	2013年3月	<p>(発行：大阪府国民健康保険団体連合、執筆担当箇所：P12-36)</p> <p>講座前後における身体組成及び身体活動量、歩数、食事摂取量の変化に関して報告書をまとめた。解析対象者は、講座前後の計測値が揃っている男性12名(67.3±5.2歳)、女性9名(63.1±4.7歳)とした。介入前後の計測結果を</p>

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
4 その他		
22. 【報告書】平成24年度高槻市健康づくり・地域ネットワーク推進事業「リーダーカアップウォーキング教室」報告書	2012年3月	比較すると、男性では、歩数に大きな変化が見られなかったが、中等度以上の身体活動時間が増加傾向にあった。また食事ではPFC比率が改善していた。このことが臍周囲の減少に少なからず影響したと考えられた。女性では低強度の身体活動時間が減少した。また食事では、脂質エネルギー比率に改善がみられた。しかし、全対象者で講座後に体重が増加していたことから、介入終了日が正月後であったことで参加者の食事が普段とは大きく異なっていたと考えられた。さらに、菓子の摂取量の増加が大きく影響している可能性が考えられた。 (発行：大阪府国民健康保険団体連合、執筆担当箇所：P2 0-43) 講座前後における身体組成及び身体活動量、歩数、食事摂取量の変化に関して報告書をまとめた。析対象者は、講座前後の計測値が揃っていない者及び運動・食事の制限・服薬による影響の可能性がある高血圧症及び糖尿病の既往歴のある者を除いた男性5名(69.0±6.5歳)、女性11名(64.1±3.9歳)とした。講座前後の計測結果を比較すると、男性では、歩数は減少したが、総消費エネルギーや運動量、高強度の身体活動時間が増加した。また食事ではPFC比率が改善していた。女性では、歩数や、身体活動時間の増加が見られた。しかし、介入後で体重や臍周囲が増加した。今回の講座では、健康ウォーキングマップを作成することが重点的に展開されていたため、今後、健康づくりのために、運動だけでなく、食事改善方法に関する情報を定期的に対象者に提供していく必要があると考えられた。
23. 【報告書】平成22年度泉南市健康教育普及推進事業「ウォーキングの輪を広めよう、生涯元気!講座」報告書	2010年3月	(発行：大阪府国民健康保険団体連合、執筆担当箇所：P3 1-33) 講座前後における身体組成及び身体活動量、歩数、食事摂取量、生きがいスケール等の変化に関して報告書をまとめた。解析対象者は、講座前後の測定数値が揃っている30名(男性8名、女性22名)とした。講座前と比較し、講座後において男女共に体重、BMI、臍周囲径で有意ではないが、減少した。また、男女ともに歩数が介入後に増加がみられた(男性P=0.959、女性P=0.060)。食事摂取量については、男女共にエネルギー摂取量が増加した。また、講義後の生きがいスケールの点数が増加したことから、この講座に参加することにより、人に認められ、さらに人に必要とされたことが生きがい感に寄与していると考えられた。

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
1. 公衆栄養学第8版	共	2020年3月	光生館	著者：古畑公、松村康弘、小林知未(他14名) 担当範囲：第3章「国民健康・栄養調査」、「国の健康増進基本方針と地方計画」
2. 公衆栄養学第7版	共	2019年3月	光生館	著者：古畑公、松村康弘、小林知未(他14名) 担当範囲：第3章「国民健康・栄養調査」、「国の健康増進基本方針と地方計画」
3. 公衆栄養学実習 改訂2版 学内編	共	2018年3月	南山堂	著者：幸林友男、上田秀樹、小林知未(他8名) 担当範囲：第4章「計画したプログラムの実施」「プログラム評価」
4. 公衆栄養学第6版	共	2018年3月	光生館	著者：古畑公、松村康弘、小林知未(他14名) 担当範囲：第3章「国民健康・栄養調査」、「国の健康増進基本方針と地方計画」
5. 食物と栄養科学シリーズ 栄養教育論 第2版	共	2017年3月	朝倉書店	著者：朝倉書店 担当範囲：田中敬子、前田佳子、小林知未(他8名) 担当範囲：3「栄養教育計画立案」、5「栄養教育における国際的動向」
6. 公衆栄養学第5版	共	2017年3月	光生館	著者：古畑公、松村康弘、小林知未(他14名) 担当範囲：第3章「国民健康・栄養調査」、「国の健康増進基本方針と地方計画」
2 学位論文				
1. Dietary methodological study: development of a food frequency questionnaire for Japanese children	単	2010年09月		3-11歳の子どもを対象に食事調査を実施し、得られた586名の食事データから供給率法・重回帰法を行い、75項目の小児用食物摂取頻度調査法(以下、CFFQ)を開発した。また、開発したCFFQ及び成人用に開発されたAFFQを用いて、3-16歳の子ども103名を対象とし、子どもの食事調査法として、どちらの方法が有用であるか検討した。3-11歳の子どもにおいて、食事摂取量を評価するには、CFFQの方が有用であることが示唆された。(学位取得：国立大学法人 奈良女子大学)
3 学術論文				

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
1. 地域が主体となる子どもの生活習慣応援事業（子ども食堂）における食事提供と学生ボランティア活動の現状と課題(査読付)	共	2021年1月25日掲載予定	日本食育学会誌 第15巻第1号	本研究では、「子どもの生活習慣応援事業」における活動に焦点をあて、提供料理や子どもの料理選択状況、学生のボランティア活動に関する満足感や負担感、学び等を明らかにし、活動の中で可能な子どもに向けた食に関する支援ならびに、持続性のあるボランティア活動としていくために必要な学生支援を検討することとした。 子どもが選択した料理区分数をみると、ほぼ全員が4区分以上の料理を選択できていた一方で、牛乳を選択する子どもは約20%であり、料理を選択した後に残してしまう子どももみられた。また、学生へのアンケート調査からは、食に関わる専門職を目指すにあたっての経験値を高め、将来へつなげる実践力を磨くことができる活動であることが示唆されたものの、子どもとのコミュニケーションの難しさに負担を感じていることも明らかとなった。 今後は、「子どもの生活習慣応援事業」の場を望ましい食生活の実現に向けた子どもへの食育の場としていくとともに、学生がボランティア活動を楽しく安心して進めるための支援を行い、継続した活動となる仕組みを構築していく。
2. 大学生におけるポスターを活用したポピュレーションアプローチの検討(査読付)	共	2020年7月	日本食育学会誌 第14巻第3号	ポスターを活用し大学生を対象とした、大学における情報へのアクセスの確立を目指し、ポスターによるポピュレーションアプローチの効果はどの程度あるのか検討することを目的に調査を行った。本研究では、掲示してあるポスターを確認する者は多くても約50%であり、ポスターを確認した者においても、内容を理解し自分自身の飲水行動を振り返ることができたが、知識の付与までには至らないことが示唆された。今後、行動変容ステージを踏まえながら情報量に変化を持たせ、学生が興味を引くポスターを掲示し、繰り返し情報を提供することによって大学における情報へのアクセスの確立を目指したい。(小林知未、金田直子)
3. 高校野球選手を対象に媒体の受け入れやすさに着目した食教育の実践と評価(査読付)	共	2019年1月	日本食育学会誌 第13巻第1号	食教育を受ける機会が少ない高校野球選手19名を対象に、媒体の受けやすさに着目した食教育プログラムを実施し、このプログラムが食事に対する態度や体組成変化に有効であるか検討した。食教育を実施したことにより、食に対する態度や体組成に改善が見られたため、選手の身体づくりに望ましい影響を与えられたことが示唆された。 (上田 由喜子、山本 千尋、明神 千穂、小林 知未)
4. 管理栄養士・栄養士、栄養教諭を目指す学生による主体的な地域ボランティア活動の効果と今後の展望	共	2017年12月	帝塚山学院大学人間科学部研究年報19号P115-123	管理栄養士・栄養士および栄養教諭を目指す学生の主体的な地域ボランティア参加動機、学びを把握し、今後に向けた展望を考察するために、地域ボランティア参加者を対象に、自記式質問票で調査を実施した。ボランティア参加動機では、奉仕の精神、自身を高める機会として期待があることが確認できた。また、栄養教諭免許を取得予定である学生は、取得しない学生に比べ、ボランティアに対しての満足度が高い傾向にあった。今後は、ボランティアの事前・事後教育の充実を図り、本取組みを継続する予定である。(金田直子、小林知未、八竹美輝、福田ひとみ)
5. 若年者におけるロコモティブシンドロームと食習慣や食行動、ストレス状況との関連について	共	2017年12月	帝塚山学院大学人間科学部研究年報19号P124-133	大学生を対象としてロコモ度テストを用いて若年者におけるロコモティブシンドローム(以下、ロコモ)の実態を把握し、さらに食習慣や食行動ストレス状況等との関連要因を検討することを目的とした。身体計測、ロコモ度テスト、食習慣調査、食事調査、うつ尺度短縮版(GDS)、24時間簡易行動時間調査を実施した。ロコモ度テストでロコモのリスクがあった者をリスク高群、リスクが無かった者をリスク低群にグループ化した。解析対象者は男性16名、女性55名であった。ロコモのリスクを有する者の割合は対象者全体で45.0%であった。GDSとロコモのリスクとの関連は認められなかった。今回の調査における対象者の半数近い者がロコモのリスクを有していたため、若年期からのロコモの予防対策としての食教育や運動教育の実施が急務であると考えられた。(小林知未、金田直子、新野弘美)
6. 高齢者における食行動と身体状況との関連について	共	2016年12月	帝塚山学院大学人間科学部研究年報18号P85-92	高齢者の朝食内容や身体状況について把握するために、大阪府S市近辺に在住している55名(男性9名、女性46名)の高齢者(平均年齢±標準偏差(以下同様)男性70.9±7.3、女性63.4±9.5歳)を対象とした。女性において、朝食で様々な食品を食べている者や好ましい食行動をしている者の方がBMIや体脂肪率、収縮期血圧が低かった。今後、対象者を増やし、継続的に調査を行っていくこと予定である。(小林知未、新野弘美、福田ひとみ)

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
7. 成人における年代別・性別の共食頻度と生活習慣，社会参加および精神的 健康状態との関連（査読付）成人における年代別・性別の共食頻度と生活習慣，社会参加および精神的 健康状態との関連（査読付）	共	2015年12月	栄養学雑誌 73(6), P243-252	家族との共食頻度に影響を与える要因を明らかにするため共食頻度と生活習慣、社会参加および精神的健康状態の関連について家族と同居している成人935名を対象者に調査を行った。若年女性では、共食頻度と精神的健康状態が関連しており、中高齢期の男性および女性では生活習慣や社会参加が関連していることが示唆された。共食の推進には、年齢や性別の阻害要因・促進要因に配慮した施策が必要と考えられる。（赤利吉弘、小林知未、小林千鶴、植杉優一、内藤義彦）
8. Effectiveness of diet versus exercise intervention on weight reduction in local Japanese residents(査読付)	共	2012年01月	Environ Health Prev Med	体重を減量するためには、食事介入と運動介入のどちらが効果的であるかを評価することを目的とした。対象者は奈良県に在住する40～69歳の男性と女性とした。対象者を性、年齢、住居を考慮して無作為に4つのグループ(食事と運動介入群(DE群、n= 16)、食事介入群(D群、n= 15)、運動介入群(E群、n= 15)、コントロール群(C群、n=16))に群分けを行った。介入前と比較し介入後のBMIは、DE群では6.6%、D群では5.3%、E群では2.3%、C群では2.2%減少した(p<0.05)。腹囲も全てのグループで減少した。血糖値は、DE群のみで有意(p<0.05)に減少した。運動のみで介入を行うよりも食事と運動を組み合わせる介入を行うことが、体重減少等に有効であることが示唆された。 (Chihiro Toji, Naoko Okamoto, Tomomi Kobayashi, Yoko Furukawa, Sanae Tanaka, Kayoko Ueji, Mitsuru Fukui and Chigusa Date)
9. Reproducibility and validity of the food frequency questionnaire for estimating habitual dietary intake in children and adolescents(査読付)	共	2011年03月	Nutrition Journal	子どもの日常的な食事摂取状況を評価するために開発したCFFQと成人用に開発された既存の食物摂取頻度調査法(AFFQ)を用いて成長期(3-16歳)の子ども89名を対象に妥当性と再現性を検討した。さらに、どちらのFFQがより子どもの日常的な食事摂取状況評価に適しているかを検討した。2方法とも高い再現性が確認された。年齢群(3-11歳:年少群、12-16歳:中等群)でCFFQ及びAFFQと秤量食事調査法(WDR)とを比較し、妥当性を検討した。年少群において、AFFQよりもCFFQの方がWDRとの間の相関係数が高かった。一方、中等群はWDRとの関連について、AFFQとCFFQでの相関係数に差は見られなかった。以上の結果から、年少群において、CFFQの有用性が示唆された。 (Tomomi Kobayashi, Miharu Kamimura, Shino Imai, Chihiro Toji, Naoko Okamoto, Mitsuru Fukui and Chigusa Date)
10. Development of a food frequency questionnaire to estimate habitual dietary intake in Japanese children(査読付)	共	2010年04月	Nutrition Journal	小児用食物摂取頻度調査法(以下、CFFQ)を開発するために、幼稚園児・小学生を対象に1日の食事調査を実施した。この調査で得られた料理について、料理または単一の食品を「FOOD」と定義した。調査で得られたFOOD数は1043個であった。このFOODを100g当たりの栄養素等含有量に大差を認めないものを集め、編成し、275個のFOODとした。供給率法・重回帰法を行い、両方法から得られた食物の重複を除き、再編成し、75個の質問項目を得た。この75項目に小学校の給食摂取状況質問票を加え、CFFQを完成させた。 (Tomomi Kobayashi, Miharu Kamimura, Shino Imai, Chihiro Toji, Naoko Okamoto, Mitsuru Fukui and Chigusa Date)
11. 10代から始める生活習慣病対策と中学・高校・大学一貫教育システムの構築	共	2005年03月01日	生物高分子学会誌 Vol.5, No.1, Page17-18	中学・高校・大学一貫教育課程をいかにして、10代からの生活習慣病への意識開拓、早期対応、バイオサイエンスや生命への理解、興味の誘発というこれからの教育システムを考えたい。中学・高校の理科の授業において爪の切りくずより遺伝子DNAを取り出し、アルコール耐性、肥満しやすい体質、アレルギー発症などの遺伝体質を学び、その現れ方が生活習慣と密接に関連することを理解させる。インフォームドコンセントの意義を詳しく説明し、生命倫理の本質と個人情報管理の意義を学ばせる。大学生対象の実際の調査では、肥満でなくてもやせ願望が強い傾向にあり、継続した食行動調査とそれに基づく栄養管理指導システムの構築とのリンクが必要である。(矢野めぐむ、小林知未、猪原梨沙、瀧井幸男)
その他				
1. 学会ゲストスピーカー				
2. 学会発表				
1. 中学生における野菜に関する意識や知識向上に関する検討		2020年9月	第67回日本栄養改善学会学術総会(札幌市)	【目的】中学生が野菜の知識を得ることで野菜に関する意識や知識が変わるか検討することを目的とした。【方法】大阪府T中学校に在籍する1～3年生を対

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
2. 園児への「バランスのよい朝食」に焦点を当てた食育介入の有効性に関する検討		2019年9月	第66回日本栄養改善学会学術総会(富山市)	<p>象とした。2019年5月中旬に野菜に対する意識、野菜に関する知識クイズ等についてアンケートを実施した(教育前調査)。5月末~7月初旬の間、中学校の食堂に食卓メモを設置し、野菜に関する情報を書いたポスターを食堂の掲示板と各クラスに掲示した。7月末に再度アンケート調査を実施した(教育後調査)。野菜に関する知識クイズは正解1点として計23点満点で合計した。【結果】教育後において、食堂で昼食を食べることがあると回答した370名中188名(50.8%)が食卓メモを読んでいた。また、野菜に関する知識クイズの得点は教育前10.2±1.6点、教育後13.7±2.4点で、教育後に有意に上昇した。【考察】教育後において、成人における野菜摂取目標量を含めた野菜に関する知識が向上した。(小林知未、西尾久子)</p> <p>【目的】こども園に在籍する園児を対象に、「バランスのよい朝食」に焦点を当てた食育介入効果を評価することとした。【方法】対象者をこども園に在籍する5歳児42名とした。登園後、保育士が確認しながら園児自身が当日に摂取した朝食の食品を5つのグループに分類し、該当する食品グループについて、朝ごはんシートにシールを貼付した。栄養教育前5日間に朝ごはんシート(以後、教育前)を実施し、栄養教育を1回行った。その後、2回目の朝ごはんシート(以後、教育後)を5日間実施した。教育前後のシール枚数の増減を本研究の評価指標とした。【結果】また、全ての食品グループで教育後において有意にシール貼付枚数が増加した。【考察】栄養教育や朝ごはんシートを継続的に行うことによって、食知識の習得や朝食習慣の形成につながると考えられ、栄養教育の教材として朝ごはんシートを使用することは有効であると考えられた。(小林知未、西尾久子)</p>
3. 食品広告の現状について		2019年9月	第66回日本栄養改善学会学術総会(富山市)(発表者:小林知未)	<p>【目的】機能を訴求する食品の広告の実態について調べることを目的とした。【方法】2018年4月15日から、5月14日の1か月間に発行された新聞2誌および折込チラシに掲載された、食品の機能を訴求した広告について調査した。【結果】何らかの機能性、又は機能について消費者に推測させる表示、栄養素に関する表示等を含む食品広告は、延べ340件であった。また、特定保健用食品は、18件、栄養機能食品は、27件、機能性表示食品は、53件であった。1つの食品に対し最も多いものでは、2誌の紙面及びチラシを合わせて19回掲載されていた。【結論】ガイドラインに即していない広告もあることから、事業者に対し適切な広告を望むとともに、消費者は、食品の機能性に関する知識をもち、正しく見て判断する力を獲得する必要性が示唆された。(西尾久子、小林知未)</p>
4. Influence of nutrition education using a poster of nutrition labeling on food selection by Japanese university students		2019年8月6日	Asian Congress of Nutrition 2019	<p>【目的】飲料に着目し、栄養表示に関するポスターを介した栄養教育による食品選択行動への影響について検討した。【方法】対象者は食物栄養学科学生327名とした。2018年5月から7月に飲料に着目した栄養表示に関するポスターを大学廊下に掲示し、5月と7月に自記式アンケート調査を行った。【結果】ポスターを見た者は18.3%であった。食品・飲料選択時において、いつも栄養表示を参考にすると答えた者は、ポスターを見た群ではポスター掲示前10.3%、掲示後23.6%、ポスターを見ていない群では掲示前8.0%、掲示後9.7%であった。【考察】ポスターを見た者が少なかったことから、より視覚的なポスターにするなどの工夫が必要である。(Naoko Kaneda, Tomomi Kobayashi)</p>
5. The degree of interest of Japanese university students in nutrition labeling		2019年8月6日	Asian Congress of Nutrition 2019	<p>【目的】日本の大学生の栄養表示への関心と、食習慣や健康行動との関連について検討することを目的とした。【方法】対象者は食物栄養学科に通う学生440名(男性52名、女性388名)とし、自記式アンケート調査を行った。【結果】栄養表示に関心がある者は31.0%であった。栄養表示に関心のある者は、正しい栄養情報を入手しようとする者が有意に多く、商品を購入時に栄養表示を必ず確認している者も多く、ダイエット経験があり、現在も行っている者の割合が高い傾向がみられた。【考察】大学生に対しては、栄養表示への関心を高め、正しい栄養表示の活用方法を提供することで、健康的な商品選択を促すことができる可能性があることが示唆された。(Tomomi Kobayashi, Naoko Kaneda)</p>
6. 大学生における食品購入時の栄養表示の参考度と食習慣・健康行動との関連について		2018年3月	第17回日本栄養改善学会近畿支部学術総会(京都市)	<p>大学生における食品購入時の栄養表示関心度と、食習慣や健康行動との関連について検討した。対象者は食物栄養学科に通う学生43名とした。食品購入時の栄養表示参考の有無や自身の健康度、食習慣等について自記式アンケート調査を行った。さらに、食物摂取頻度調査(以下、FFQ)を実施し、主成分分析</p>

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
7. 地域における子どもの生活習慣応援事業（子ども食堂）の現状と今後に向けた支援の検討		2018年3月	第17回日本栄養改善学会近畿支部学術総会（京都市）	<p>を行った。栄養表示参考群は全体の25.0%であった。参考群では、非参考群と比較し、健康的な生活を心がけている者の割合が有意に高かった。主成分分析結果から5つの食事パターン因子が抽出され、非参考群において、嗜好品中心食の因子得点が有意に高かった。大学生に対しては、栄養表示の知識や関心を高め、正しい栄養表示の活用方法を提供することで、健康的な食行動を促すことができる可能性があることが示唆された。（小林知未、金田直子）</p> <p>大阪府S市M校区では、学童期の子もたちにおける望ましい生活習慣形成に向け、毎月1回、バイキング形式の朝食支援や歯磨き指導、本の読み聞かせを地区組織が主体となり実施しており、本学の希望学生がボランティアとして参加している。食事提供の現状を把握し、今後に向けた支援を検討した。毎月の日誌内容から食事提供状況を把握した。2018年12月に実施された子ども食堂へ参加した児童へ無記名自記式のアンケート調査を行った。バランスよく料理を選択できていた児童が多くみられた一方で、料理選択後に残してしまう児童や牛乳を選択しない児童もみられた。今後、子どもの健やかな成長のための一助となるよう支援を続けていきたい。（金田直子、小林知未、酒巻梨々花、泉川樂生、福田ひとみ）</p>
8. 大学生における地域と連携した食育推進に向けた検討		2017年9月	第64回日本栄養改善学会学術総会（新潟市）	<p>大学生における食育推進を目指すために、地域と連携した健康づくりの一環として、大学生に向けた生活習慣病予防教室（以下、予防教室）を試みた。3月中旬に大学生22名を対象に減塩と野菜摂取量増加に関する講義及び減塩料理の調理実習を実施した。大阪府S市食生活改善推進員（以下、食改）（19名）への食育に関する意識調査、予防教室参加者に、予防教室事後調査実施した。食改において、食育の対象世代を幼児期と回答した者は大学生と回答した者はより多かった。予防教室に参加した全ての学生が予防教室への参加が食生活を見直すきっかけになったと回答した。大学生において学年が上がるにつれ食生活の乱れが見られたことから、学生の特性に応じた生活習慣改善対策が必要であることが示唆された。大学生に対する食育は大学のみで実施するのではなく、大学と地域とが連携し、推進していく一策である。（小林知未、金田直子）</p>
9. 高齢者における食行動と身体状況との関連について		2016年10月	第76回日本公衆衛生学会総会（鹿児島市）	<p>高齢者の朝食内容や身体状況について把握することを目的とした。解析対象者は女性46名（平均年齢63.4±9.5歳）であった。身長、体組成、血圧、長座体前屈、握力の測定を行った。また、質問紙（食行動、朝食内容、不定愁訴等）、国際標準化身体活動質問票（IPAQ）、身体活動能力質問表（SAS）を自記式で記入してもらった。対象者は全員毎日朝食を摂取していた。朝食において野菜摂取群は非摂取群よりもBMIや収縮期血圧が有意に低く、体脂肪率が低い傾向が見られ、望ましい食行動を行っている者が多かった。朝食の質が体組成と関連していることから、朝食の質について今後指導していく必要があると考えられた。（小林知未、新野弘美、福田ひとみ）</p>
10. 高校生における朝食に焦点を当てた食育の推進（第3報）－短期間の食習慣改善指導の効果－		2015年9月	第63回日本栄養改善学会学術総会（青森市）	<p>公立高校に通う女子生徒17名を対象に、朝食改善を図ることを目的に食教育を含めた介入を2ヶ月間実施した。介入前後の野菜摂取量、食行動、不定愁訴等を比較検討した。朝食野菜摂取者割合は、介入前は33.3%であったが、介入後では55.6%に増加した。介入後、朝食野菜非摂取者の中で、日常でイライラすることがあると回答した者が80.0%であったのに対し、野菜摂取者は全員イライラすることが無いと回答した（P=0.024）。朝食での野菜摂取の有無が不定愁訴の有無に関連している可能性が示唆された。（小林知未、小林千鶴、内藤義彦）</p>
11. 高校生における朝食に焦点を当てた食育の推進（第2報）－短期間の食習慣改善指導の効果－		2014年9月	第62回日本栄養改善学会学術総会（福岡市）	<p>公立高校に通う生徒20名を対象に、朝食改善を図ることを目的に食教育を含めた介入を3ヶ月間実施した。介入前後の野菜摂取量、食行動、不定愁訴等を比較検討した。栄養教育前後で野菜を食べていた者は教育前後の体脂肪率の増加量が有意に少なかった。食事で様々な食品を摂取することで、PFC比率の適正化に繋がる可能性が高く、体脂肪率の増加抑制に影響があるのではないかと考えられた。（小林知未、小林千鶴、内藤義彦）</p>
12. ラダリング法を用いた若年女性の食事選択動機に関する研究		2014年11月	第74回日本公衆衛生学会総会（長崎市）	<p>若年女性を対象に食事選択行動とその価値意識との関連を明らかにし、食事を選択する際に影響を及ぼす動機の検討を行った。食事選択の価値意識は楽しさ、時間、美容、健康、経済性に分類された。時間を重視している者は嗜好飲料やアルコールの摂取量が少なかったことから、時間を重視している者は、</p>

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
13. 新しい食事評価指導ツールの妥当性に関する研究～食事聞き取り法の検討～		2013年8月	第61回日本栄養改善学会学術総会(横浜市)	ゆとりが少なく、食事に時間をかけない傾向があると考えられた。本研究では、若年女性の食事選択行動の背景にある価値意識を得ることができた。(小林知未、小林千鶴、湊聡美、内藤義彦)
14. LIFESTYLE FACTORS INFLUENCING THE DIETARY HABITS OF SCHOOL CHILDREN FROM KINDERGARTEN THROUGH JUNIOR HIGH-SCHOOL IN AN URBAN CITY IN JAPAN		2012年9月7日	The 16th International Congress of Dietetics	新しい食事評価ツールとしてAndroidのタブレット端末を用いた食事評価ツール「栄養君Touch!」(以下、Touch!)を開発した。従来のパソコンを用いた栄養君と比較し、Touch!の有用性を検討することを目的とした。対象者は女子大生40名とした。Touch!で1日分の食事の再現に要した平均時間は、11.6±0.2分であった。食事の再現後、Touch!と栄養君において各々55%、50%の者が楽しかったと回答した。Touch!を活用することで、食事調査の時間を短縮や負担感を軽減することができる可能性が示唆された。(小林知未、小林千鶴、赤利吉弘、爲房恭子、内藤義彦)
15. バーコードと料理写真を用いた食事評価指導ツールの開発と妥当性に関する研究		2012年12月2日	第11回日本栄養改善学会近畿支部学術総会	幼稚園から中学校の子どもの食習慣と生活習慣の現状を知り、食教育プログラムを開発することを目的とした。寝屋川市の幼稚園から中学校に在籍する4953名を対象とし、質問票を用いて食習慣や生活習慣を調査した。朝食欠食割合は中学生で最も高かった(P<0.00)。朝食欠食の理由は、起床・就寝時刻が遅く、間食を食べていることであった。年齢毎に子どもの食習慣や生活習慣や食への関心が異なることが示され、食教育プログラムを作成した。今後、開発したプログラムを用い、年齢に応じた食教育を行い、評価していきたいと考えている。(Tomomi Kobayashi, Kobayashi Chizuru, Yoshihiko Naito)
16. 新しい食事評価ツールの有用性に関する研究～ピタッシ栄養君との比較～		2012年10月	第72回日本公衆衛生学会総会(津市)	バーコードと料理写真を用いた新しい食事評価ツール「ピタッシ栄養君」(以下、栄養君)を用いて、大学生の前日の食事摂取量の推定精度を検討した。調査期間は2011年9～11月、対象者は女子学生29名とした。食事写真から食事摂取量を推定する方法(写真法)をゴールドスタンダードとした。写真法を実施した翌日に栄養君で前日の食事を再現してもらった。食事調査は3回実施した。解析対象は29名の81日分の食事とした。写真法と栄養君でのエネルギー摂取量は各々1454±341、1659±375kcal(P<0.01)であった。相関係数は0.56(P<0.01)であった。栄養君を用いて、エネルギーと3大栄養素に関して中等度の正の関連を認めたことから、大学生で栄養君を用いて前日の食事を良好に再現できると考えられた。今後、対象者が料理をイメージしやすい媒体及び聞き取り調査法を検討していきたいと考える。(小林知未、小林千鶴、内藤義彦)
17. SATシステムによる高齢者を対象とした前日及び習慣的な食事摂取量推定の妥当性	共	2011年09月10日	第58回日本栄養改善学会学術総会	食事摂取量の把握に役立つ補助教材を使用し、栄養君での栄養素等摂取量の推定精度向上について検討を行った。写真法を実施した翌日に栄養君で前日の食事を再現してもらった。栄養君で食事調査を行う際に補助教材を用い、詳細に聞き取りを行った。解析対象は32名の食事とした。2方法間のエネルギー摂取量は各々1674±448、1759±452kcal/日であり、有意な差は見られなかった。栄養素等摂取量の相関係数の中央値は0.67であった。(小林知未、小林千鶴、赤利吉弘、内藤義彦)
18. バーコードを利用した料理選択方式による栄養診断システムの開発と応用に関する研究	共	2010年10月28日	第69回日本公衆衛生学会学術総会	SATシステム(以下、SAT)を用いて高齢者を対象に、前日及び習慣的な食事摂取量推定の妥当性を検討した。食事をデジタルカメラで撮影する方法(以下、カメラ法)をゴールドスタンダードとし、カメラ法実施翌日にSATを用いて、前日の食事を再現した。また、カメラ法を1ヶ月間に4回実施し、その平均値を習慣的な摂取量とした。SATは、摂取頻度の高い料理を朝食1回、昼食・夕食3回、間食2回選択してもらい、その平均値を習慣的な摂取量とした。前日の食事推定でのカメラ法とSAT間の全栄養素等摂取量の相関係数の中央値は0.42であり、習慣的な食事推定での中央値は0.49であった。高齢者を対象に前日及び習慣的な食事摂取量について、SATを用いて評価することが可能であると考えられた。(小林知未、五反田真理、天野恵、小林千鶴、加藤亮、内藤義彦)

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
19. 園児・児童の食生活に関連する環境要因について	共	2010年09月5日	第57回日本栄養改善学会学術総会	藤亮, 内藤義彦) 子どもの食嗜好・生活習慣と母親の意識が、子どもの食事を与える影響について検討した。園児・児童623名、母親572名を対象者とした。子どもに対しFFQを用いて食事調査、生活習慣に関するアンケートを実施した。全ての調査は母親が回答した。解析は、園児、低学年(小学校1~3年生)、高学年(小学校4~6年生)の3群に分けた。幼稚園児と低学年において、嫌いな食品を母親が子どもに提供する群は、提供しない群より栄養素等摂取量が高かった。子どもの栄養素等摂取量は、母親の影響を受けていることから、栄養教育は子ども及び母親にも行う必要があると考えられた。(小林知未, 上村美春, 今井志乃, 古川曜子, 岡本尚子, 福井充, 伊達ちぐさ)
20. 成長期のための食事調査法-第1報 成人用食物摂取頻度調査法の適用は可能か?		2009年9月4日	第56回日本栄養改善学会学術総会	子どもの日常的な食事摂取状況を評価するために開発したCFFQと成人用に開発されたAFFQを用いて3-11歳の50名の子どもを対象者とし、1ヶ月間隔の2回のCFFQと4回のWDRを実施し、妥当性と再現性を検討した。さらにどちらのFFQがより子どもの食事の評価方法として適しているかを検討した。2方法とも高い再現性が確認された。AFFQよりもCFFQはWDRとの間の相関係数が高く、WDRと比較して、ほとんどの栄養素等摂取量の平均値で有意な差は見られなかった。この年齢の集団においてはAFFQよりもCFFQを適用することが望ましいことが示唆された。(上村美春, 小林知未, 今井志乃, 北田有紀, 田路千尋, 篠原秀子, 福井充, 伊達ちぐさ)
21. 男性勤務者のためのITを活用した減量プログラムの効果：無作為化比較試験		2009年10月22日	第68回日本公衆衛生学会学術総会	働き盛りの男性に、自分の都合に合わせて生活習慣の改善に取り組むことができるWebを活用した1年間の減量プログラムを開発し、無作為化比較試験でその効果を検証した。30-49歳でBMI25以上30kg/m ² 未満である男性85名を対象者とし、年齢層化無作為配置で2群(以下、前期群と後期群)に分けた。前期群にWebを用いて、1年間の体重減量を目的とした運動と食事の介入を行い、後期群は対照群とした。この2回の栄養素等摂取量と体重、BMI、腹囲の差を比較した。前期群は後期群と比較し、有意に主要栄養素、体重、BMIの差が減少した。以上の結果から、この減量プログラムは、前期群で有意な減量効果が見られた。(岡本尚子, 上田由喜子, 小林知未, 田路千尋, 上村美春, 福井充, 伊達ちぐさ)
22. 小児用食物摂取頻度調査法の妥当性と再現性の検討		2009年1月24日	第19回日本疫学会学術総会	子どもの日常的な食事摂取状況を評価するために開発したCFFQと成人用に開発されたAFFQを用いて3-11歳の50名の子どもを対象者とし、1ヶ月間隔の2回のCFFQと4回のWDRを実施し、妥当性と再現性を検討した。さらにどちらのFFQがより子どもの食事の評価方法として適しているかを検討した。2方法とも高い再現性が確認された。AFFQよりもCFFQはWDRとの間の相関係数が高く、WDRと比較して、ほとんどの栄養素等摂取量の平均値で有意な差は見られなかった。この年齢の集団においてはAFFQよりもCFFQを適用することが望ましいことが示唆された。(上村美春, 小林知未, 田路千尋, 篠原秀子, 福井充, 伊達ちぐさ)
23. 成長期のための食事調査法-第2報 小児用食物摂取頻度調査法の開発と妥当性		2009年09月4日	第56回日本栄養改善学会学術総会	CFFQが子どもの日常的な食事摂取状況を評価するために有用であるか、89名(3-16歳)の子どもを対象者とし、1ヶ月間隔の2回のCFFQと4回のWDRを実施し、妥当性と再現性を検討した。2回のCFFQから高い再現性が確認された。エネルギーや多くの栄養素摂取量において、年齢ごとに2群に群分けを行った場合、園児・小学生群ではほとんどの栄養素等摂取量において、WDRとCFFQとの間の平均値に差は見られず、相関係数も中等度であったが、中高年生群ではCFFQの過小評価が見られた。以上の結果から、CFFQは園児・小学生群において、日常的な食事摂取状況を評価することが可能な方法であることが分かった。(小林知未, 上村美春, 今井志乃, 北田有紀, 田路千尋, 篠原秀子, 福井充, 伊達ちぐさ)
24. 画像による食事記録法の開発とその妥当性		2008年9月6日	第55回日本栄養改善学会学術総会	マツト法と秤法の妥当性検討を行うために、20日分の食事について、WDR、マツト法、秤法を同時に実施した。20日分の食事写真から管理栄養士・栄養士10名が独立して、食品名と重量を推定した。WDRとマツト法、WDRと秤法の相関係数の比較を行った場合、秤法の方がマツト法より高い相関係数が得られた。また、推定の誤差については、エネルギーの±10%の誤差において、推定者、推定の順序の影響を除いても、マツト法と秤法の間に有意差が見られ、マツト法より秤法の方がより正確であった。(田中早苗, 小林知未, 岡本尚子, 福井充, 田路千尋, 上地加容子, 篠原秀子, 伊達ちぐさ)

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
25. Which is More Effective for Weight Reduction, a dietary Intervention or an Exercise Intervention? : A Randomized Controlled Trial		2008年9月11日	15th International Congress of Dietetics	減量目的による食教育及び運動教育の効果を明らかにするため、奈良県K市及び同県R郡K町の、BMI24以上28kg/m ² 未満の男女住民62名を無作為に4群(食教育と運動教育A、食教育のみB、運動教育のみC、対照D)に分類した。Intention-to-treat解析による各群における介入期間前後の体重変化は、4群ともに有意(p<0.05)に低下(A6.6%、B5.3%、C2.3%、D2.2%)した。(Chihiro Toji, Naoko Okamoto, Tomomi Kobayashi, Yoko Furukawa, Sanae Tanaka, Hideko Shinohara, Kayoko Ueji, Mitsuru Fukui, Chigusa Date)
26. 料理を質問項目とした小児用食物摂取頻度調査法の開発		2008年09月06日	第55回日本栄養改善学会学術総会	子どもの日常的な食事摂取状況を評価するCFFQを開発するために、幼稚園児・小学生を対象に1日の食事調査を秤法を用いて実施した。この調査で得られた料理について、料理または単一の食品を「FOOD」と定義した。調査で得られたFOOD数は1043個であった。このFOODを100g当たりの栄養素等含有量に大差を認めないものを集め、編成し、275個のFOODとした。供給率法・重回帰法を行い、両方法から得られた食物の重複を除き、再編成し、75個の質問項目を得た。この75項目に小学校の給食摂取状況質問票を加え、CFFQを完成させた。(小林知未, 田中早苗, 田路千尋, 篠原秀子, 上村美春, 岡本尚子, 福井充, 伊達ちぐさ)
27. 画像による食事記録法の開発とその妥当性		2008年01月25日	第18回日本疫学会学術総会	マット法の妥当性検討を目的とし、15名の対象者にマット法とWDRを実施した。得られた食事写真から管理栄養士8名が食品名とその重量を推定した。WDRとマット法による栄養素等摂取量の相関係数は、エネルギー、たんぱく質、炭水化物で高値を示したが、脂質と食塩相当量は低値であった。また、両法でのエネルギーの相関係数は高かったが、絶対値では差が見られたことから、マット法は、集団における順位付けには利用できるが、精度にかけることが示唆された。(田中早苗, 小林知未, 上地加容子, 岡本尚子, 福井充, 田路千尋, 古川曜子, 篠原秀子, 伊達ちぐさ)
28. IT活用プログラムによる身体活動の検討		2007年10月25日	第66回日本公衆衛生学会学術総会	若年男性(20~49歳)のメタボリックシンドローム予防対策として、Webを用いた肥満を改善するための食事・運動介入プログラムを開発した。Webでのデータ回収の予備研究を行い、Webを用いた調査の実行可能性を検討した。若年男性を対象に、Webを用いて、身体活動についてアンケート形式による調査を実施した。ほとんどの男性からアンケート結果を回収することができたことから、Webを用いた方法が働き盛りで時間の制約のある若年男性において、実行可能な方法であると考えられた。(上田由喜子, 新野弘美, 小林知未, 田中早苗, 岡本尚子, 福井充, 伊達ちぐさ)
29. IT活用による若年男性勤務者のための肥満改善プログラムシステムの概略		2007年10月25日	第66回日本公衆衛生学会学術総会	若年男性(20~49歳)のメタボリックシンドローム予防対策として、肥満を改善するための食事・運動介入プログラムを開発することを目的とした。若年男性は働き盛りであり、勤務時間を考慮しなくてはならない。そのため、調査時に時間の制約が少ないWebを活用し、食事と運動の望ましい習慣をつける継続可能な肥満改善プログラムを開発した。(岡本尚子, 小林知未, 田中早苗, 上田由喜子, 福井充, 伊達ちぐさ)
30. IT活用による食事調査法の開発に関する検討		2007年10月25日	第66回日本公衆衛生学会学術総会	他の食事記録法と比較して、簡便な調査法であるデジタルカメラを用いた2種類(マット法と秤法)の食事調査を、働き盛りの男性を対象に実施した。各々の方法で撮影された食事写真をWebを介して回収し、この対象集団での食事調査の実行可能性を検討した。秤法の方が実行できる者の割合が高かった。また、Webでの写真回収は、対象者のパソコン能力や、パソコン環境が大きく影響した。(小林知未, 田中早苗, 上地加容子, 岡本尚子, 福井充, 田路千尋, 古川曜子, 篠原秀子, 上田由喜子, 伊達ちぐさ)
31. IT活用による食事調査法の開発に関する予備的検討		2006年12月6日	第5回日本栄養改善学会近畿支部大会	新しい食事調査法として、デジタルカメラを用いた方法を開発し、食事調査の実施可能性を検討した。一辺5cmの格子柄ランチョンマットを料理の大きさを把握するためのスケールとして使用した調査法(以下、マット法)は、対象者に料理を1品ずつ、食前の状態の上から・斜め45度から・横から撮影し、食後、空の食器(1つの料理に対し、計4枚の写真)を撮影する方法である。そのため、写真枚数が増え、対象者の負担となった。一方、秤法は、デジタルスケールの上に料理をのせて撮影する方法である。料理の重量が分かるため、料理1品に対し、食前に斜め45度から撮影し、食後の食器の撮影する計2回の撮影で良いため、マット法よりも対象者への負担が少ない方法であると考えられた。(田中早苗, 小林知未, 上地加容子, 岡本尚子, 福井充, 田路千尋, 古川曜子, 篠原秀子, 上田由喜子, 伊達ちぐさ)
32. 食教育推進を目的とした児童の食		2006年10月2	第53回日本栄養改善学	小学生の食生活の実態把握と評価を行うために、奈

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
生活評価		6日	会学術総会	良県N小学校の児童へ簡易型自記式食事歴法質問票を実施した。食事の食べるはやさと体型には有意な関連が見られ、食事をはやく食べる児童において、肥満児の割合が高かった。(小林知未, 伊達ちぐさ, 塚本幾代, 上田由喜子, 佐々木敏)
3. 総説				
4. 芸術（建築模型等含む）・スポーツ分野の業績				
5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
6. 研究費の取得状況				
1. 地域高齢者の市販弁当等の購買状況を踏まえた適切な食事の普及啓発のための研究		2017年4月～現在	厚生労働科学研究費 代表：東京都健康長寿医療センター研究所 本川 佳子	高齢者を対象とした市販弁当等の利用実態や、市販弁当等の利用を考慮した食事パターン、市販弁当等の栄養素等摂取量の実態を把握し、(1)都市部、地方の地域在住高齢者を対象に市販弁当等購入を考慮した食事調査および市販弁当等の食品分析を行い、基礎的データを構築すること、(2)得られた食事パターン別に食事摂取基準と比較して過不足傾向のある栄養素等について検討し、適切な摂取に資する普及啓発用資料の素案を作成することを目的に調査を行う。

学会及び社会における活動等

年月日	事項
	日本栄養改善学会 日本公衆衛生学会 日本健康教育学会 日本家政学会 日本食育学会